

# 大会講演

能登半島地震から約一年、震災復興一周年を記念して、和倉温泉観光会館にて、和倉温泉短歌大会を開催しました。

今年で七回目を迎えた伊香保短歌大会は、伊香保温泉「ホテル天坊」での開催でした。

両大会ともに、お集まり下さった方々が熱心に耳を傾けておられた講演を、今号では紹介いたします。

NHK学園生涯学習フェスティバル

## ●和倉温泉短歌大会

とき／二〇〇八年四月二十三日（水）

ところ／石川県七尾市

演題 文語の歌と口語の歌

講師 岡井 隆先生……3

## ●伊香保短歌大会

とき／二〇〇八年六月十二日（木）

ところ／群馬県渋川市

演題 短歌と笑い

講師 小池 光先生……13



# 「短歌と笑い」

小池 光

今日は「短歌と笑い」ということで、五十分くらい雑談をいたします。中身は難しいことは何もない、すごく簡単なことなのです。

## ひたむきで真面目な短歌人

短詩型には短歌と俳句と二つありますね。大体、日本の文化というのは、二つずつペアになっているような不思議なところがあります。囲碁と将棋、柔道と剣道、お花とお茶とかね、大体、二つでワンセット。短詩型の場合は、短歌と俳句というのが二つ並んでいます。

この二つはそもそも兄弟分ですが、中身は全く違います。文学的な中身以前に、やっている人のタイプ、性格みたいなものが先ず違う感じがします。

明日は俳句の大会があるそうですが、た

ぶん会場に座っている人の顔つきとか雰囲気、今日と明日では大分違うのではないかと思います。

一口でどう違うかと言うと、歌を作る人とはとにかく真面目です。褒め言葉ともいえませんが、そこは微妙なのですが、とにかく真面目で一生懸命に労を厭わず働き、要するに日本人のお手本みたいな人です。そういう方たちがずっと短歌をやってきたということが、少なくとも近代の短歌というもの、何か大きな人間的な性格にあるのではないかと思うのです。

その点俳句は違っていまして、何とこのかな、楽しいんですよね。楽しくワイワイ、元気に活発にやっているのが多分、俳句というものではないかと思えます。

それを痛感するのは、角川書店が年に一回お正月にやる「俳壇歌壇、名刺交換会」、

パーティーですね。

私も時々行くのですけれども、何百人か、俳句と短歌の人が一堂に会するんです。入り口で名札が渡されて、俳句の人が黄色かな、短歌の人が青でして、だから胸についている名札の色をただで俳句か短歌か分かるわけです。

で、まず黄色い名札の人を見ると、着ている物が違う。女性のことは置いておいて、男の人ですが、例えば黄色というか山吹色というか、そういう色のブレザー着て、頭が銀髪。年配の方だけど、それが格好いい。様になっているという人がいます。大胆なとか派手な服装をして、様になる人。それはほぼ100パーセント俳句の人ですね。

短歌の人は、たいてい普通の格好をしている。そのまま会社に行けそうな、ちょう

ど私のような格好をしている(笑)。集まって、楽しそうにキャッキヤと盛り上がっているのは俳句の人たちですね。短歌の人は大体、黙々と食べています(笑)。

ともかく真面目に一生懸命、ひたむきに、といふかな、それがやはり短歌というものの体質なので、いい悪いは別にして、近代短歌のここ百年くらいで表れた非常に特殊な現象であることは知っておいたほうがいいのではないかと思います。昔の人はもう少し違うふうにやっていたはずだと思います。

### 「笑い」を今こそ見直してみる

今日の「笑い」ということになるのですけれども、今お話したようにそもそも歌人は体質的に苦手として、また苦手な人の心の中には、「笑い」というものに対する偏見というか、もつという蔑みの感情がある。立派な人になればなるほど笑わない。ケラケラすぐ笑うのは軽薄な連中だ。また、人生の真理というのは少なくとも、笑いの中にはない。悲しみとか感動とかそういうものにあると思っていて、笑ったりす

るのは軽薄で軽はずみなことで感心しないという気持ちだが、短歌を作っている人の心の中にあるような気がします。

でもそれは、私は大きな誤解のような気がしてならない。笑いというのは非常に人間的なことで、人間とは何か。いろいろな定義がありますけれど、人間というのは笑う動物であると、そういう言い方も一つできるのです。他の動物は笑わない。人間らしさというのは、笑うか笑わないかにある。そういう見方もできます。

では人間はどういう時に笑うか。可笑しいから笑う。確かに可笑しい時に笑うのですが、しかし可笑しい時だけではないのですね。全然可笑しくない時にでもいくらかも笑います。

笑った時の言葉はたくさんあります。「アハハ」「ウフフ」「オホホ」とか、「ニヤニヤ」とか「ニタリ」とかね。全部違うわけでしょう。可笑しいから「アハハ」と笑うかと言うと、そうとは限らなくて、例えば、分かりやすく言うと、会社の社長さんが部下の前で「俺は太っ腹なんだぞ」と見せた時も、「アハハ」と笑う。可笑しく

も何ともないのにね。これはいわゆる豪傑笑いで、可笑しさとは関係がない。

その逆もあるのですね。自分を小さく見せる時にもまた笑う。つまり、お追従笑いとか、卑屈な笑い。「社長さん、どうぞ、どうぞ」なんて遜へりくだってお酒を勧めるような時、人は必ず笑います。不思議ですが、誰に教わったわけでもないのですが。

これだけとつても「笑い」ってすごく奥行きのある感情です。もつといえは、他人に優越感を感じた時も人は笑いますよね。せせら笑いみたいに「ふん、あいつは」と。実際に顔が笑うかどうか分からないですが、そういう時も「笑う」といいます。あるいは、自らが自らに対して笑うということもあります。自嘲する、です。俺はこの程度のものなんだという時、人は笑ったりします。

微笑みというものもありますね。これは誰が見てもこの世で最も良いものではないでしょうか。赤ちゃんの微笑みとかね。あの微笑みは可笑しさとは全然関係ありません。思わずにつこり笑うというのは、可笑しさを感じているわけではありません。あ



る満足感かな。ここにすることが幸せだと  
いう気持ちがあるという形で現れていま  
す。微笑みが私たちに安らぎを与えてく  
れるのは、私の前にいる人が私に向かっ  
て笑ってくれた時に、自分の存在が認めら  
れたというかな、あなたがいることで私は幸  
せだと、そういうメッセージを与えてくれ  
るから私も幸福になるわけです。

「アハハ」と笑うのはあまり奥行きがない  
けれど、「クスクス」という笑いはまた味  
わいが深い。「クスクス」は禁じられた笑  
いでしょね。つまり、笑ってはいけない  
い、それなのに可笑しいという時に、人は  
「クスクス」という感じになるのではない

でしょうか。笑いというのは不思議な性質  
があつて、禁じられれば禁じられるほど増  
殖していく。

絶対、笑ってはいけないというのと、どん  
どん笑いが膨れていきませんか。娘時代に  
はそういう経験がたくさんなさっているで  
しょう。

このように、笑いの多様性というのは、  
「泣く」に比べてはるかに窓口が広い。「泣  
く」というのは割と単純といえます。うれ  
し泣きというのもあるけれども、泣くとい  
う感情は思っているほど多彩ではない。笑  
いはその十倍くらい広い。人間は実にいろ  
んな所で笑って生きているということなの  
です。その「笑い」に対するアンテナとい  
うか、感受性を閉ざしてしまうのは、非常  
につまらないことで、人生の楽しみの大事  
な部分に、自ら蓋をしてしまうような気が  
します。

短歌が今陥っている迷路みたいなものの  
一つに、笑いを殺してしまったということ  
が考えられる。一冊の歌集を読んで一回も  
笑わない、どこにも笑うところがないとい  
うのは、やはりそれは何か違うのではない

か。「笑い」は非常に多彩なわけでして、  
そういうものとどこかのページで出会わな  
いと、どうもそれは本物でないという気が  
してならない。

### 「可笑しさ」を感じる茂吉の歌

斎藤茂吉は、誰が見ても近代短歌百年の  
ナンバーワンの歌人で、神様なのですけれ  
ども、この茂吉の中に実は、非常に多彩な  
笑いがあるように思います。茂吉の歌集を  
しばしば読んでみると私は爆笑する。とこ  
ろが、茂吉は神様だということになると、  
笑ってはいけないという巨大な蓋がかかる  
んですね。

神様に祀り上げた時に、なぜか日本人は  
そうなのです。天皇陛下のしゃべったこと  
は絶対に笑ってはいけないとかね、何かそ  
ういうのが我々にありまして、斎藤茂吉も  
神様になった時に、誰もが笑いということ  
に目を塞いでしまった。

しかし、茂吉を神棚から一旦下ろして読  
み直してみると、すごく可笑しい歌、面白  
い歌、多彩で微妙な笑いがたくさん転がっ  
ています。

「つきかげ」というのは茂吉の最後の歌集で、昭和二十三年に山形県の疎開先から東京に戻ってきて、二十九年に死ぬのですが、その最晩年の歌を集めた歌集です。最後の二、三年は寝たきりで歌を作ることもしなくなっていましたから、六十代から七十にかけての、五、六年の間ですかね。

亡くなってから編まれた唯一の歌集でして、茂吉が編んだのではないのですが、そういう意味で面白く、自由奔放な歌がとりわけ多くて、ああ、年を取ってくるというのも悪くないという印象を与えます。私が思わず笑ってしまった歌を六つ引いてきました。何でこれが可笑しいか、少しお話をしてみます。

人間は予感なしに病むことあり癒れば  
ば楽しまほらねばこまる

私はこれは爆笑したんです。爆笑というとか不真面目な感じに聞こえるかもしれませんが、そうではなくて実に面白いことを言うと思つてね。

「人間は予感なしに病むことあり」、確かにそうなんです。健康でびんびんしていた人がある時、全く何の予感もなしにドン



と病気になることがある。しかも、風邪などではなく思いもかけない病気になる。

これは誰が読んでもすぐわかりますが、でも何かすごく単刀直入というか、歌の表現としては何も構えていないというか、我々でももう少しそれらしい言い方を工夫するんだろうと思うけれども、「人間は予感なしに病むことあり」と短歌の上の句とも思えないくらい、投げ出したようなぞっけない言い方です。

まずこれが少し可笑しい。

もっと笑うのはやはり下の句。「癒れば楽しまほらねばこまる」というのです。「そりゃあそくだよな」って、誰でも読んだ

瞬間、直ちにそういう反応がでる(笑)。

全くこれ以上でも以下でもない。その以上でも以下でもないということが、誠に端的に、あられもなく差し出されてきたところに不思議な可笑しさを私は感じます。

特にこの「なほらねばこまる」ということですよ。何と普通の言葉でしょう。病気が治らなかつたら困るんですよ。誰でもそうじゃないですか。それを「なほらねばこまる」と、平仮名書きでスツと書いてしまふところに、とほけた、人を食った、何かそういうものを笑いとして、私は受け止めます。

この歌を難しい顔をしてしみじみと鑑賞するというのは、もう既にそこで違うのではないかなと思います。みなさん、どっと沸かないといけない(笑)。

もちろんこれは茂吉を少し読んでくれば、かりそめの言葉でないのはすぐわかるのです。

「癒れば楽し」というのはどういうことかという、大石田にいた茂吉は死を覚悟するような病気にかかり、それがなんとか治るんですね。最上川べりを散歩したりでき



るようになった。

直ちに思い出す有名な歌があります。「やまひより癒えたる吾はこころ樂し昼ふけにして紺の最上川」。病氣から治った私は、心が楽しい。昼過ぎに紺の最上川を見に行くとこの歌です。

ですから「癒れば樂し」は、茂吉が数年前に自らの体と心で味わってきた死を覚悟した病の感覚がまさに後ろにあって、一般論を言っているのではないのです。この歌を詠んだ時、私はどれだけ楽しかったか。もし治らなかつたら、さだめし困つただろうと。

この歌から受けるのは、どこか人を食つたような老境特有のユーモア、投げ出したような可笑しみであると思います。

錢湯にわれの來るとき浴槽にて陰部をあらふ人は善からず

これも可笑しいでしょう。こういうのはほとんど笑わないと駄目ですよ。

錢湯に行ったのですね。昭和二十三、四年頃、茂吉の家にもお風呂はあったと思うのですが、東京ですからもまだ燃料がなくて家庭ではお風呂は焚けなかつたという事情があつたように思われます。

東京の新宿辺りか、世田谷辺りの焼けた錢湯。茂吉が行ったら、前に入つていた男がいて、風呂の中で手ぬぐいを使つて陰部を洗つていた。実に不愉快だ、という歌です。

最近はお湯ぶねの中にタオルを持ち込まないでくださいとありますが、まだそういう時代じゃないですから、そんなことは当たり前前だったのでしよう。

これが何で可笑しいかというところ、「陰部をあらふ」というところが可笑しいですよ。なにもここまで言うことないじゃないですか。

「錢湯の浴槽の中で手拭いを使つてゐる人は善からず」とか、普通それで十分わかるではありませんか。「陰部」なんて強烈な日本語でして、およそ短歌では見ません

よ。それを平然と歌に投げ込んで、陰部を洗つている人間は善くないと言つた時、普通に生きてゐる上での言葉と表現のサイズ、大きさ、そこからはみ出すものがある。普通、ここまで言わない。過剰なのです。バランスが悪い。しかし、これは斎藤茂吉の大きな特質なのです。

茂吉という人はエピソードの塊で、面白い話が山ほどあつて、こんなに面白い人ではないのではないかと思います。息子二人、北杜夫さんと斎藤茂太さんは文学者ですから、父親のことは山ほど書き残しました。文学者の目で見れば話ですから、面白い話は山ほどあります。

言つたついでに一つだけ紹介すると、茂吉は非常に食意地が張つていた人です。食食物に對するこだわりが過剰にある。誰でも食食物にこだわりがありますが、茂吉は特殊な食食物ばかりにものごくこだわります。例えば、鰻だつたら、鰻、鰻、鰻。その上、過剰にけちんぼうなのです。

食食物にこだわつてけちんぼうだとなつるかというところ、珍しいものが手に入つた時に独占して食う。妻や子供には一切食わ

せない。

戦後、食べ物がない時に、茂吉先生の所へあるお弟子がロースハムを一本、ドーンと届けた。多分、進駐軍からの横流し物資だと思うのですけれども、茂吉は狂喜して家族の前で宣言するんですよ。これは俺がもらったものだ。お前たちは食ってはいけないと。でも家族はまた始まったと思うから、「はあ、どうぞ、どうぞ」と言う。食事の時に茂吉はそのハムを持ってきて自分の分だけ切って、近くに猫が来るとそこへちよつと投げてやる（笑）。

つまり、家族には食わせないけれども、猫にはちよつと食わせている。そのことを北杜夫さんと茂太さんが対談の中で「あれにはまいったなあ」と言っていました。

そういう話が点々とある。何かが過剰なのですね。その過剰さに、何か人を食った笑いがある。斎藤茂吉しかこういう歌は作らないのですが、茂吉自身は大真面目で歌を作っていて、まったく面白いとか、人に笑いを与えると思っていない。

銭湯の歌も本当にけしからんと思ったから詠った、怒りの歌なんです。しかし、そ

れがどこか過剰で、怒りの形が普通の人とちよつと違うために、私などは一読して爆笑してしまう。これが茂吉の可笑しさですね。茂吉の歌で笑っていると、「何がおかしいんだ！」という茂吉の言葉を背後に感じます。

### 嫉妬心も深かった茂吉

次の歌も何が可笑しいんだ、の典型です。

濃厚の関係にある面相に熱海の道を  
つれだち歩む

分かりますか、これ。これは主語が省略されています。「つれだち歩む」ですから、私と誰かがと読んでしまうかもしれませんが、それは間違いです。戦後、茂吉が熱海の旅館街に湯治に行ったことがあって、その時に作った歌です。

熱海の町をぶらぶらしていたら、向こうから男女が歩いてきた。面白くないんですね。「あいつら、イチヤイチャしやがって」と。茂吉の過剰さというのは、ジェラシーという点でもすごいものがありまして、非常に嫉妬深いんです。陸まじい男女を見る

とすぐに過剰に反応します（笑）。

嫉妬というのは人間の根源的感情の一つで、嫉妬心のない人はいませんね。男と女の間だけでなく、いろんな所で出てきます。どんな人間も最後まで持ち続ける、非常に厄介な感情です。嫉妬するなど言ったって止まらないですよ。大抵の人は嫉妬する自分というのを自覚して、「ああ、そういう自分が嫌だな」と思う。だから、内向して、ぐじゃぐじゃになり、陰々滅々としてくる。怒りとか憎しみはもつと単純で、ドーンと出てくるのですが、嫉妬は陰に籠るやりきれない感情です。

茂吉のこの歌も一つの嫉妬心なんです。茂吉の嫉妬は、今いったようなネチネチさがありませんね。温泉街だから男と女



が連れ立って来ることはいくらでもある。それを「濃厚の関係」と見る。この「濃厚」は俗語なんですけれど、「濃厚の関係にある面相に」ってものすごい表現ではないですか。

ただ歩いてきただけなのに、あいつら、寛一、お宮を気取りやがって、見ている茂吉のほうはどんどん思い込みが深まって行って、許せないと、そういうふうに出て行った歌なのね（笑）。

向こうから来た見も知らぬ二人に対するジェラシーを燃やしている。絶対に女の人がすごく綺麗な人だったんだと思います。俺はもうこんなに年取って一人で来るしかないのに、あいつらは、とね。

自分で思い込んだことに、自分自身が反応しているという可笑しさが漂っていて、実に笑える歌なのです。

### 不思議な笑いを誘う歌

今お話したような茂吉の気持ちだが、歌から手に取るように透けて見えるので、むしろ愛嬌と言ったほうがよいかもしれない。茂吉の嫉妬心には愛嬌がある。



「愛嬌」というのは、茂吉の大事なキーワードだと思います。ただ、本人はこれが愛嬌だとは全く思っていない。本人はあくまでも大真面目なんです。でも、なんともいえない愛嬌がある。だから笑う。しかし笑うと怒られる。「何が可笑しいんだ」と。そういうのが茂吉の面白さですね。

つまり、禁止されている笑いなのです。もちろん現実には茂吉が目の前にいないから、禁止されていないのですけれども、やはり「クスクス」なんです。 「アハハ」と笑うと茂吉に怒られるから、「クスクス、クスクス」と読んでいくと、どんどんどんどん可笑しさが増殖されていくのです。

たまたまに農の家よりいでてこし猫がわが乗れる汽車見てゐたり

これは全く何気ない歌だけれど、これも私は可笑しかったですね。なぜかという、なんで「たまたま」だつてわかるのかと（笑）。

これは多分、汽車の窓から見ていたら、農家があつてそこに猫がいたというだけの場面でしょう。それを「たまたまに農の家よりいでてこし」って、何でわかるんだろう。この「たまたまに」がものすごく可笑しい。まるで猫の心がわかっていてみたいでしょう。

「わが乗れる汽車見てゐたり」というのも何か変ですよ。これが写生というのであれば、写生というのは相当変なことではないか。

つまり猫がこつちを見ていてと何で分かるんだということ。猫の顔がこつちを向いているから見ているといえば見ているんだが、「見る」とは何かというのと、網膜に映ったことが「見る」ではないのです。 「見る」というのは認識、「あ、盆栽だ」というのが「見る」ということなのだ。

で、こつち側に映っているだけでは「見る」ということにならない。

ですから、猫は汽車のほうを向いています。が、「ああ、汽車だ」とか、「ああ、渋川へ行くんだ」とか、そういうことは絶対思わないわけです（笑）。

汽車を見ているように見える、というのならまだわかります。しかし、そういう曖昧な断定は茂吉は絶対にやらないわけでして、「猫がわが乗れる汽車見てゐたり」と断定するのです。

たまたまに出てきた猫が、私の乗っている汽車を見ていたっていうのは、ものすごくいい思い込みでしょう。全部、自分が猫の側に行っちゃって、全く疑わない。曖昧さが全くない。これもやっぱり過剰な思い込みです。

こういうのを実相観入というのですかね。すると過剰な思い込みとあまり違うなような気がするけれども。しかし、いずれにしてもこれも意図したのとは全然違うユーモアがあって、私は笑います。

日本橋ひとり渡れどおのがじしほかの人もわたりて居るも



笑えませんか？ 可笑しくないなら、笑わなくていいんですよ（笑）。

あまりの馬鹿馬鹿しき、無内容ってこういうことです。日本橋を私が歩いていたら、他の人も歩いていたら。当たり前ですよ（笑）。

「おのがじし」という実に微妙なのが挟まっけていて、「おのがじし」なんてほかで翻訳できない日本語ですね。あえていえば人それぞれにということかな。つまり、日本橋を私が一人渡っていると、他の人も人それぞれに渡っておりますよ、という歌でしょう。全く歌として無内容。

日本橋を渡ったら何か事件が起きたとか、せめて、渡って行ったら海の方から風が吹いてきたとか、私たちは普通そういうことで歌にするではありませんか。

こういう言葉を使いたくないけれど、あ

種の呆けみたいなね。若い時の茂吉にはさすがにこういう歌はない。もつとシャーブでピッピッとした歌でしたね。茂吉は非常に老いが早く来た人で、最後の十年くらいは動作もすごくスローモーションになって、フワーとしてきたといわれますけれど、そういう茂吉の味が出ている。

年を取ってポワーンとしてくることはある意味ですごくいいことで、私たちのおじいちゃん、おばあちゃんなんて皆フワーンとしていたし、それが何かすごくありがたいものを感じさせてくれたと思うのですが、今はなかなかフワーンとする場所もないし、最後までフワーンとしちゃいけないというプレッシャーがすごくありますね。茂吉のこういうフワーとした歌も、老いの歌として不思議な笑いを感じさせます。

茂吉を通して「可笑しみ」を知る

真実の限りといひて報告す部屋の中にて折々倒る

有名な歌で、最後に作った歌の二、三首前かな。歌集「つきかげ」には入っていない、全集に作り直した時に、佐藤佐太郎

が発見して入れた、といういわく付きの歌です。

すごく厳肅な歌で、歩くことができなかったって、外出もできない。部屋の中を辛うじて移動するだけ。しかも、多分、杖か何かついていて、時々バタツ、バタツと音を立てて畳の上に倒れる。人間はこうなるんだという歌ですね。

ですから、いささかも笑いとは無縁の歌として読まれてきたわけけれども、しかし、私は何となくこれも不思議な笑いというと言いますけれど、何か一抹の可笑しさが後ろにあるような気がする。

「報告す」は一体、誰が誰に向かってですかね。報告というの、何か求められてする、役割があるからするということであって、しかし、出し抜けに「これが真実の限りだから報告するぞ、お前たちに」とくる。「何ですか」というと「いや、時々、倒れるんだよ」。(笑)。やっぱりそれはね、可笑しいですよ。

これは人間が、人間の体が辿り着いた最後の姿で、それはすごく厳肅で大変なことなのです。それでもやっぱり部屋の中で

時々倒れるというのは、何か可笑しいんですよ。この歌をただ神棚に飾って茂吉先生の最期はこうなって誠にお気の毒です、と、それでは駄目だという気がします。

いずれにしても、こういうのが茂吉の歌の笑いで、複雑でしょう。単純に可笑しいことが書いてあるという笑いではない。二読、三読、四読していくと、何となく歌の後ろにかすかな可笑しみみたいなものが張り付いている。それに触っていくということが歌の読み方としてすごく大事だと思います。

短歌って面白くなければ……

現代歌人の歌からいくつか挙げます。奥村晃作さんは、「ただことうた」といって、三菱のボールペンの歌とありますがご存知ですか。

私より十歳くらい年上で、独特の歌を主張して作っておられて、すごく私は笑えます。ただ、奥村さんも、可笑しい歌を作っているとは思っていないと思います。その点、茂吉と似ています。本人は大真面目なんです。

『多く連作の歌』という、それ自身人食った歌集が出ましたが、その中から海水浴に行つて溺れた歌です。連作で二十首くらい並んでいます。

遊泳禁止のアナウンスありて海中の人ら次々陸に上がりぬ

奥村さんの歌は単純ですから解説を要しません。この通りです。

遊泳が禁止の海に溺れかけわれなつとくす遊泳禁止

上がつてくたさいといわれて皆上がるかという、人間の常で九割くらいの人は上がりますが、一割の人は「うるせえ」と言つて泳いでいます。奥村さんもその一人



なんです。

「せっかく海に来たんだから泳ぐぞ、俺の命は俺のものだ」なんて言ってる（笑）。そして、溺れかけました（笑）。

「遊泳が禁止の海に溺れかけて、それで私は納得した」「何を?」「遊泳禁止を」（笑）。可笑しいでしょう、これ。人間はそういう場面になって初めて納得する。溺れかけて監視員が飛び込んできて助けてくれる。それで初めて遊泳禁止って、そうだ、遊泳しちゃいけないんだ。私が悪うございましたと。

沖に流されそうになるのを、監視員が助けてくれます。まるで、あなたは神様だ、みたいな歌があり、そのあとにこういうのがあります。

溺れかけ八十万円の人工歯口から流れ行くを送りき

これは傑作ですね。短歌ってやっぱりこのくらい面白くないとね。

溺れかけた時に、息ができないからやり口を開けてもがくのでしょうかね。これ以上開けられないくらい口を開けてモガモガするので、そこへ海の水が入ってくる。そ

したら、入れたばかりの八十万円の歯が外れて……（笑）。

これはもう回収不可能です。「流れ行くを送りき」というのが、絶妙な表現で、特に「送りき」というのがうまいですね。奥村さんはこういうところのさばきが非常に安定している。呆然と口を開いて、送るしかない。「送る」というのはこういうことだね。

「八十万円」がいいですね。実際、八十万円だったと思います。どんどん奥歯が抜けていくので、奮発して八十万円出してようやく歯を入れた。そのことも、確か前の歌集にあったと思います。それが溺れかけてなくなっちゃった（笑）。

でも、八十万円損しても、この歌ができたのだから少しは回収したのではないですか。これは奥村さんの代表作ですよ。

### 新しい局面をむかえている短歌界

花山多佳子さんは私と同じ年です。女性らしいと思えるから、「笑い」は女性には苦手な分野の一つだと思います。ただ、最近女性でもずいぶん様変わりして可笑しい



歌集がたくさん出てきました。

花山さんなんかはその典型で、淡々たる日常詠で別に面白がらせようと思っていないと思うのですが、結果的にすごく笑ってしまう歌がたくさんあります。「木香薔薇」は去年の斎藤茂吉短歌賞の歌集ですが、この大根の歌は名作になりましたね。

大根を探しにゆけば大根は夜の電柱に立てかけてあり

場面がわかりますか。前後の歌はないので読む側が推測するんですけど、何で大根を探しに行くのかというと、スーパーで大根を買ったのに、なぜか途中で落として

きたんです。それも間が抜けていますけれど、花山さんを知る人なら、ああ、それもあるかなと（笑）。

とにかく、家へ帰ってきたら大根がない。ないといつて探しに行くのも可笑しい人なんだけれど（笑）、探しに行ったら大根は電柱の横に立ってかけてあったというのです。ここにドラマがあります。

全然見も知らない人が、あ、誰かが大根落としたんだと。きっと家庭の主婦だろうからひよつとしたら拾いにくるかもしれない。このままだと車に轢かれるから、この辺に置けば目立つだろうと、電柱の下に立てかけて置いてくれたというんでしょう。実際にあつた話だと思ふのですが、しかし実に不思議なユーモアがあつて面白いですね。



兎がいま食べてゐるのは『草の庭』の菜紐なり。一寸のこる。

ぎよつとしました。『草の庭』って私の歌集なんです（笑）。兎が何で俺の歌集の菜紐を！（笑）。全然、わからない。

花山さんは兎を飼っているらしい。兎が菜紐を食べている、歌集はすでに食われてしまったような感じもします（笑）。

何だか分かりませんが不思議な可笑しさがあります。ギョツとしますけど何か可笑しいです。

わが眉毛すぐ抜きたがる娘みて夜ふり向いたときが危ない

花山さんには、母と娘という独特の関係の歌がたくさんあります。これも親子関係のある面白さを的確に歌っていると思えます。「お母さん、お母さん」といって、「なあに」と振り向くと、ピュッと眉毛を抜くというのですね。娘は遊んでいるわけですよ。不思議な親子ですね。すこく仲良さそうですね。

戻り来て畳に倒れ込むわれに「そのまま」と言ひ、むすめ写生す

娘は美大生です。絵描きの卵。お母さん

が帰ってきてパタッと倒れたら、普通は「お母さん、大丈夫？ 無理しないで」ということになります。

ところが「あ、ちよつとそのままでいて。死んだ人の写生するから」って（笑）。でもこれもすこくリアルで、ああ、こういうことするなあと思わせませぬね。

互みの毒にあてられながら母と娘おとろへてゆく若葉のころを

なかなかいい歌でしょう。女同士、顔を見ているだけでお互いの毒にあてられる。

「おとろへてゆく若葉のころを」はちよつとすら悲しいのだけれど、うら悲しさの中に可笑しさがあつて、要するに魅力的な関係の母と娘がいる。非常に生き生きとしている親子がいる。リアルである。それがどこかで可笑しさと結びついているのですね。

花山さんの歌集は、「ニヤリ」とか「ニコニコ」とか「クスクス」とか、そういう笑いを頻繁に感じる歌集で、そういう歌が女流の中からも出てきたということは、きわめて新しい短歌の局面のように思っております。